

竹林信一先生功績調書

上記の者は、大正10年8月16日、金沢市に生まれ、昭和19年9月、神戸商業大学を繰り上げ卒業後、陸軍経理学校を経て軍務に服し、陸軍主計少尉として終戦を迎えた。戦後直ちに丸和産業株式会社に入社したが、その後教職に転じ、石川県立金沢二水高等学校教諭を経て、昭和30年7月、富山大学経済学部助手となり、学究生活に入った。

同人は、昭和32年4月、和歌山大学経済短期大学部講師に転じ、同大学部助教授（経済学部助教授併任）を経て、昭和42年4月、甲南大学経営学部助教授に就任、昭和43年4月、教授に昇進し現在に至っている。同人の主たる活動の舞台は甲南大学であるが、同人はなお、その学識と経験を買われて、神戸女子大学、和歌山大学経済短期大学部、関西大学、桃山学院大学、愛媛大学、神戸大学、岐阜経済大学および大阪経済法科大学の非常勤講師をも務めた。

同人は、現在に至るまでに、著書1冊、共著4冊、論文34篇を物し、経営学、なかんずく経営労務論の研究者として夙に令名が高い。すなわち、同人は、かのフレデリック・ウインスロー・テイラーによって創始・主張されたテイラー・システムとテイラーリズムおよびヘンリー・フォードによって創始・主張されたフォード・システムとフォードイズムに始まるアメリカの近代的経営実践を深く研究することから出発し、続いて、テイラーおよびフォードの主張に対するアンチ・テーゼとして登場したヒューマン・リレーションズの研究に取り組み、さらに、いわゆる近代経営組織論の勃興の実質的背景をなす経営労務問題の新展開に対しても積極的に研究を進めて来た。また、同人はアメリカにおける労資関係の生成と発展に関して継続的に研究をおこない、経営労務研究の歴史的な肉付けを試みるとともに、さらに、賃金論的

2 竹林信一先生功績調書

研究、いわゆる日本の経営の観点から見た経営労務研究、コンピュータリゼーションの観点から見た経営労務研究など、極めて幅広い研究をおこなって来た。同人の学風はこのように極めて堅実かつ正統的であり、その研究分野は、アメリカにおける労務管理および労使関係の歴史的な発展過程を踏まえた広範なものとなっている。そして、その当然の一帰結として、同人の名著『労務管理の研究』（評論社、昭和41年1月）は、当該分野における代表的な研究の一つとなっており、今日に至るまで高い評価を保ち続けている。

同人は、甲南大学経営学部において、着任以来終始一貫して重要科目の一つ経営労務論を担当するとともに、その卓越した幅広い学識と経験を踏まえて経営学総論および経営学の講義をも分担し、経営学部の中心教授としての重責を果たして来た。その誠実で人間味豊かな講義は学生の圧倒的な人気を博し、同人の人柄を慕う学生はその数極めて多い。同人が演習を通じて数百名に及ぶ有為の門下生を育成したことも、特筆に価する。門下生が、大学卒業後も同人を中心に結集し、同窓組織を形成して親睦を深めるとともに、研究会などを開催して相互啓発に努めていることは、知る人ぞ知るところである。すぐれた研究者が同時にすぐれた教育者である好例をここに見ることができる。

同人は、研究者・教育者として尽力したのみならず、また、大学行政にも献身し、すぐれた手腕を発揮した。すなわち、同人は、昭和45年4月から昭和46年3月まで就職指導部長に就任し、昭和47年4月から9月まで再び就職指導部長に就任した。同人は10月には経営学部長に就任し、昭和49年4月には再選されて昭和51年3月まで経営学部長を務めた。さらに、引き続いて、昭和51年と昭和52年には、甲南学園常任理事に就任し、昭和53年4月から昭和56年3月までは図書館長を務めた。その間、大学紛争の勃発に端を発する長期の混乱を收拾するに際して、また、その後の労使間の係争問題への対処に際して、同人が払った努力は忘れることができない。同人は、大学会議員、

大学院社会科学研究科経営学専攻博士課程設置準備委員，甲南学園理事，甲南大学生協同組合理事長などをも歴任し，昭和45年以来実に延べ10年の永きにわたり組織の中心にあって，甲南大学，大学院および学園全般の維持・発展に誠心誠意尽瘁した。

同人は，さらに，永らく兵庫県営競馬調査委員会会長および兵庫県労政審議会委員，兵庫県労働基準局賃金相談員を務め，また，兵庫県青年洋上大学講師（団長）を引き受けるなど，社会活動にも積極的に寄与した。

以上のように，研究・教育活動，行政的献身および社会活動を通じて同人が果たした貢献には没すべからざるものがあり，その多年にわたる功績は高く評価されるべきである。

この功績調書は，竹林信一先生を甲南大学名誉教授に推薦するに際して起草されたものであります。